

20. 今は無き村井農場

小 浜 宗 吾

※明治25年4月11日生。

私は、大正9年10月、中士別から移住、上興部（この年10月25日上興部まで鉄道開通）まで汽車で来て、忍路子入口の安部旅館に泊まっていて、此所から農場の小屋掛けに通った。

村井農場は、絹川久が管理人で、当時市来知と言った三笠市から来ており、小作では、篠山熊太郎、平間勘吾、中野竹次郎、黒田クイ、山本捨次等が古く、叶今朝治、叶伝治、菅原長助等の皆さんも古い人だ。

管理人の絹川さんから聞いた話だが、農場主の村井一族は、紀州和歌山の出身で、当主の村井貞之助は養子で、その叔父に当る人に村井吉兵衛が居た。

この人は、天狗タバコ、紙巻のヒーローなどの製造をしていて、タバコが専売制になった時に、製造権利、機械等をそっくり政府に譲渡して、財をなしたそうである。そして、村井農場の土地も、その見返りとして入手したのだそうである。

村井農場の最初の開拓は、農業より造材と木炭焼きで、農業にカの入ったのは、木材を伐り終ってからだ。

農場の造材の初めは、美深の池田木材で、その後引続いて奈井江の空知木材になり、三浦新次さんが監督をしていた。

西興部村の矢板、ボウズなどの炭坑木の始まりは、空知木材が、造材した青木の裏木を利用したのが最初だと思う。

小作は、農業より木炭焼きをする方に力が入り、農場入殖者の殆どが、木炭焼きを経験している筈だ。それだけに小作人の出入りも激しくて、その人たちの名前も良く覚えていないが、一番沢山入殖したときは、60戸近くもあった。

普通入殖地には、荒山開墾の最初は菜種を作ったものだが、此所では菜種作付けした者の記憶はなく、除虫菊が沢山作られた。

私が入殖して3、4年後に、作付、収穫方法などの視察に、若林喜衛、吉江栄市さん等5、6人で和寒へ視察に行ったことがある。農場では、大町吾助さんが一番沢山作付した。

村の酪農は、大正15年頃が始まりで、絹川久が盛んに奨励しながら、7、8頭購入し、菅生喜太郎さんが、その飼育に当たっていた。

牛乳は、分離器でクリームにして、名寄に送って居たが、村上勝治、丹野初太郎さんらも飼育していた。六興地区には、大分乳牛が飼育されていたようで、乳牛、除虫菊とも、農場は村の先がけであった。

（補足）村井農場は、大正6年3月、東京の人、村井貞之助が、六興と中藻の中間丘陵地帯、740町5反余を、土地代金3,179円、立木代金487円27銭鎖、計3,667円で取得した。村内での大地籍開拓地としては、最後の土地であった。

除虫菊が盛んに作られ、大正14年に第1回の収穫があり、主な作付者は、大町吾助、村上勝治、叶今朝治、東良蔵、桜田寅吉、壁丈吉等で、六興部落では、蔭山恵一が多く作付けしていた。

牛の飼育は、絹川のほかに、村上勝治が一番熱心だった。この他の飼育者には、東、丹野たちがいた。

昭和8年に、124町余の耕地を、民有未墾地として、小作人に開放、昭和13年5月、農場全地を小樽市松田辰蔵に売却、松田農場と変る。

終戦時に同農場内に留まる者は、小作者に、伊藤政治、佐藤惣吉、高橋富寿、自作者では、桜田留五郎、寺島忠、星野重吉、伊藤文蔵のほかに、福家長江が居た。

戦後の農地開放により、通い作小作地も開放されて、農場は解体。昭和28年、残地山林は公売に付されて分散し、昭和45年に西興部村が、340町歩を村有杯として取得した。同地域最後の農家、伊藤文武、伊藤政治が離農し、かつての農場は原始の姿に還りつつある。

(この補足は、菅原徳三郎氏の談話及び村の資料による)